

ペスタロッチーの『探求』における人間の「発展論」について

北後 佐知子*

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

“Expantion theory” of human in Pestalozzi's "Nachforschungen"

Sachiko HOKUGO

Department of Early Childhood Care and Educatinon, Shiga Junior College

抄録:ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827) は、『探求』(1797)において「わたし自身の内にある真理,すなわちわたしの生活経験」から「わたし」そして「人類」の本質へ迫っている。人間は一般化できるような環境に生きるのではなく、一人ひとりの個別具体的な現実を生きるからである。このようなアプローチは現象学的とも位置付けることができる。その際、他の動物に対する人間の「動物的状態のたよりなさ」からアプローチした点は、人間学的として位置づけることができるであろう。ペスタロッチーには独自の、「わたし」そして「人類」の「発展」に対する観点がある。彼の「発展論」は保育・幼児教育という視点から理解することが特に重要である。ペスタロッチーの『探求』における乳幼児期は決して「下位段階」でも、成長によって「消え去る」ものでもなく、同心円的な発展の中核だからである。

キーワード:ペスタロッチー,『探求』,発展論,保育,幼児教育

1. はじめに

ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827) は、『探求』(『人類の発展における自然の歩みについてのわたしの探究』*Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts*,1797)において「わたし自身の内にある真理,すなわちわたしの生活経験」から「わたし」そして「人類」の本質へ迫っている。その際ペスタロッチーは、人間を神との関係性からというよりは、他の動物に対する、人間の「動物的状態のたよりなさ」から「わたし」、そして「人類」の本質を捉えようとした。

本研究ノートでは、ペスタロッチーが『探求』の中で論じた「わたし」そして「人類」の三つの異なる表象,すなわち「動物的」・「社会的」・「道徳的」本質に注目する。この三つの異なる表象は、個人あるいは人類の、「子ども期(幼児期)」・「青年期(徒弟期)」・「成人期(師匠期)」に例えられる。

*E-mail: s-hokugo@sumire.ac.jp

ゆえに一見、個人あるいは人類がより進んだ“段階”に移っていくという意味内容として捉えかねない。しかしペスタロッチー自身は“段階”の観点からは語っていない。たとえば村井実は「この三つの性質が、互いに浸透し合いながら、順を追って、段階的に発現していく」と述べているが、浸透し合いながら、しかし段階的という表現からもわかるように一般的な発達論とは区別が必要である。その意味ではペスタロッチーが用いなかった「段階的」という表現がふさわしいかは検討が必要であろう。¹⁾ 改めてこの点に注目することで、ペスタロッチーの教育思想を手がかりにしながら、今日における教育を保育・幼児教育の視点から問い直せるのではないかと考える。本研究ノートでは、ペスタロッチーの教育思想を保育・幼児教育の視点から捉え返す一考察としたい。

2. 〈探究〉の基点としての現象学的アプローチ

『隠者の夕暮れ』(1780)をペスタロッチーの生涯における著作期のはじまりとするならば、『探究』(1797)はその最後にあらわれたものだといえる。これらふたつの著者は「それぞれにペスタロッチー独自のいとも個性的な世界を展開し、しかも二著書が互いにいとも鮮やかな対照を示していることは、ペスタロッチーの精神史の研究にとって見逃すことのできない意義をもっている」²⁾と評価されている。『探究』の最も特筆すべき点は、「人類社会の最も根本的な問題をあくまでも、彼自身の生活体験への反省に即して究明しようとした真実な探求の成果で彼の数多い著作の中で最も深刻でかつまた包括的な人間探究の書」ということである。ペスタロッチーは本書の冒頭で次のようにいう。

「わたしの探究の歩みはその本質上、自然がわたしの個人的な発展そのものに与えた方向と異なる方向をとることはできない。だからこの探究のどの部分においても、わたしは或る特定の哲学的根本命題から出発することはできない。わたしは、われわれの世紀がこの問題に関して今までに明らかにした点をさえ無視しなくてはならない。わたしは、ここでは、わたし自身のうちにある真理、すなわちわたしの生活の経験がわたしを到達させた単純な帰結のほか、ほんらい何ごととも知りえず求めえず、またそうすべきでもない。だがまさにそれだからこの探究はわが同胞の大多数のものに対して、彼らがこの世の事物をみる見方からあまりかけ離れない仕方では彼らの最も重要な諸問題に関する説明を与えるであろう。」³⁾

ペスタロッチーが『探究』を執筆した1797年、彼はシュトゥルム・ウント・ドラング(Sturm und Drang 疾風怒濤時代)、青年期に傾倒したルソーの自然観や社会観、フランス革命、フィヒテとの出会いをきっかけとしたカント哲学、ニコロヴィウスを介したヤーコビの神秘主義・超越主義の宗教思想など、さまざまな思想哲学、そして大きな時代のうねりの影響を受けていた。そのうえでペスタロッチーは上記のように「わたし自身のうちにある真理、すなわちわたしの生活の経験がわたしを到達させた単純な帰結のほか、ほんらい何ごととも知りえず求めえず、またそうすべきでもない。」と断言している。

いかなる「哲学的根本命題」からよりも、「わたし自身」から出発することが、多くの人々にとっての「最も重要な諸問題」に通じると考えたからである。このようなペスタロッチーの立場は、大きな時代の変化のなかで彼独自の思想を確立するとともに、自分自身という体感から出発する自己と世界(人類、時代、社会を含む)の関係性の基点を示したともいえる。この基点は、思想史上の現象学的アプローチと位置付けることも可能であろう。

3. 〈探究〉の基礎としての人間学的アプローチ

ペスタロッチーは『探究』において「わたしは何か。また人類は何か。」という問いから「わたし」そして「人類」の本質に迫った。その際、ペスタロッチーは、人間を神との関係性からというよりは、他の動物に対する、その「動物的状态のたよりなさ」から「わたし」、そして「人類」の本質を捉えようとした。彼は「人間は彼の動物的状态のたよりなさを経てもろもろの認識に達する」という。この「認識」から、「物の取得」、「所有状態」、「社会状態」、「財産・権力および名誉」、「服従と支配」、「貴族と官職・王冠」、「そしてこれらすべての状況が法律に基づく権利の状態を呼び起こし」、「市民的自由を呼び起こす」というところに探究の基礎を見出した。そしてペスタロッチーは次のように続ける。

「この権利の欠乏は暴政と奴隷状態—すなわち人々が彼らを相互に結びつける法律をもたずに、しかも社会的に結合して生きる状態—を呼び起こす。だが自然の歩みをもっと迎ってゆくと、わたしはわたし自身のうちに好意を見出す。好意があるときには取得も名誉も財産も権力もわたしの心の奥底においてわたしを醇化する。しかし好意がないときには、地上におけるわたしの社会生活のこれらすべての特権はわたしの心の奥底においてわたしを卑しくする。」⁴⁾

法律に基づく権利のない社会は人々を「支配」と「服従」の関係におく。しかしそれは自然の歩みの一面であり、その歩みをさらに迎れば「わたし」は自身の内に「好意」を見出すとペスタロッチーはいう。ここでの「好意」とは、「その本質において感覚的で動物的である」。彼はこの感覚的で動物的な「好意」の重要性を強調しており、肯定的に位置付けている。

「わたしはこの好意の本性を探求する。そして好意がその本質において感覚的で動物的であることを見出す。だがわたしはわたしの心の奥底においてこの好意を醇化する一種の力を、わたし自身のうちに見出す。そしてわたしはそのようにして醇化せられた好意を愛と呼ぶ。だが愛もまたわたし自身の安楽に対する渴望のために、わたしの心の奥底において失われそうになる。そしてわたしはわたし自身のうちで荒んで放埒になる。そのときわたしはわたしの予感の力によって、この世で可能なすべての探究と知識との限界を越えて、わたしの存在の根源にまでわたしを高め、そこにわたしの本性の悪と弱点とに打ち克つための助力と救いとを求めようとする。」⁵⁾

ペスタロッチーによれば、本質において感覺的、動物的な「好意」は「わたしの心の奥底」の「一種の力」において「醇化」される。自身の内に見出されるこの「一種の力」によって「醇化」された「好意」はペスタロッチーにおいて「愛」と呼ばれる。注目すべきは、この「愛」でさえも失われそうになることがあるという点である。というのもこの点において、『基礎陶冶の理念について』(Üeber die Idee der Elementarbildung 1809)⁶⁾との差異があきらかになるからである。『基礎陶冶の理念について』のなかで彼は、基礎陶冶におけるメトデーについて、「自己活動性」「合自然性」「調和的發展性」、
「愛」の4つの原則を指摘している。「自己活動性」「合自然性」「調和的發展性」のすべてを貫いて発展を実現する根源力が「愛」なのである。村井実によれば、ここでの『愛』という考え方の出現は、とくに注目に値するものである。というのも「ペスタロッチーは『リーンハルトとゲルトルート』においては、知的陶冶の出発点として、とくに直観を強調していた。その際心情の陶冶も考えていたわけであるが、当時はそれを、一種の『内的直観』ともいうべきものの上に基礎づけようとしていた。だが今やそれが、『愛』として説明されるのである。そして、その『愛』の力が人間の発達の根源力であり、出発点であり、知的陶冶での直観を活気づける中心点でもあり、発達が最後に到達すべき到達点でもあるとされている。」からである。⁷⁾「愛」についての彼の概念内容についての詳細な検討は今後の課題とするが、ここでは、ペスタロッチーが『探求』において「好意」と「愛」を地続きに捉えていたこと、「愛」のさらに奥底に「予感」を見出していたことを重視したい。

4. 〈探求〉における同心円的發展観

ペスタロッチーの教育思想においては「境遇」という概念がたびたびあらわれる。そこには一人ひとりの現実を「陶冶」および「教育」の出発点とする意図が認められる。人間は一般化できるような環境に生きるのではなく、一人ひとりの現実を生きるからである。またそこには、貧しい子どもや、両親・家族とともに暮らすことのできない子どもたちとともに生活したことによる影響も色濃くある。ペスタロッチーは次のようにいう。

「やがてわたしは環境が人間をつくるということを知った。だが同時にわたしは人間が環境をつくるということ、人間は彼の意志にしたがって環境をさまざまに統御する一種の力を自分自身のうちにもっているということを知った。」⁸⁾

一人ひとりの人間には、あらがうことのできない「境遇」がある。ここでは「環境」という言葉を用いながら、環境が人間をつくると同時に、人間が自らの意志によって環境をつくる「一種の力を自分自身のうちにもっている」というかれの確信が述べられている。このことは、非常に重要な意味をもつ。人間は、動物としての本能にとどまりつつけることができない。一方で主従の関係をつくりあ

げるだけの社会的存在に留まることも人間の本来性には反する。自らの意志とは無関係に限界を越え出るゆえの次なる一步、そして自らの意志を持ってのみ越え出ることが可能な限界、その両者には「わたし」の内なる「一種の力」があるというのがかれの結論である。この「一種の力」によって、「わたし」は「わたし自身がつくったもの」として存在しうるからである。「一種の力」は“意志”でもあり、“神的なもの”とも考えられるが、“直観”との関連性を含め詳細な概念規定は今後の課題としたい。ペスタロッチーは次のように「わたし」の本質をまとめている。

自然がつくったものとしてのわたしは、世界をわたし自身のためにある動物として表象する。

人類がつくったものとしてのわたしは、世界をわたしとわたしの同胞との結合および契約の関係の中に成り立つ被造物として表象する。

わたし自身が作ったものとしてのわたしは、世界をわたしの自然の動物的我欲ともわたしの社会的諸関係とも関係なきものとして、まったくただわたしの内的醇化にそれが及ぼすという見地において表象する。⁹⁾

ペスタロッチーにとって、人間の「動物的状態」「社会的状態」「道徳的状态」はいずれも「表象」であるということである。ペスタロッチーが『探究』において提起したことは、異なる「表象」をもちいて優劣や段階としての発達といった観点から「わたし」や「人類」を捉えることではない。いずれもが相互に深く結びつきながら「段階」ではなく「表象」として存在する。乳幼児期および動物的・感覚的な「好意」を同心円の中核として、発展の姿を描いたのである。

5. おわりに

『探究』においてペスタロッチーは、「わたし自身のうちにある真理、すなわちわたしの生活の経験がわたしを到達させた単純な帰結」という観点から「わたし」そして「人類」の本質へ迫ることを試みた。その方が一般的な哲学的命題からのアプローチよりも、より多くの人々とのつながりを示すことができると思ったからであり、実際そうであった。

そしてペスタロッチーは「わたし」を三つの「表象」としてとらえた。幼児期にも例えられる「動物的表象」、青年期（徒弟期）にも例えられる「社会的表象」、成人期（師匠期）にもたとえられる「道徳的表象」である。これらは単に並べて比べることのできる「表象」ではない。ここにはペスタロッチーの、同心円的发展観がある。よって段階としての発達観とは区別して理解しなければならない。その意味で保育・幼児教育という視点から、彼の「発展論」と理解することは特に重要だろう。乳幼児期は決して「下位段階」でも、成長によって「消え去る」ものでもない。乳幼児期（「動物的状態」）を中核とし、「社会的状態」や「道徳的状态」が同心円的に存在する発展論だからである。ペスタロッチーはいかなる環境であれ、その環境によって人間がつくられると同時に、人間が環境をつくること

のできる存在として、自らの内に「一種の力」、— 予感、意志、神的なもの、限界を越え出る力 — を「わたし」の内奥に見出したのである。

文献

- 1) 村井実著『ペスタロッチーとその時代』, 1986年, 玉川大学出版部
- 2) 長田新著『ペスタロッチー全集 第6巻』, 平凡社, p. 3
- 3) 同上 p. 15
- 4) 同上 p. 17
- 5) 同上 p p. 17-18
- 6) 長田新著『ペスタロッチー全集 第12巻』, 平凡社, 1959年
- 7) 『ペスタロッチーとその時代』 p. 305
- 8) 『ペスタロッチー全集 第6巻』, p. 84
- 9) 同上, p. 173